

研究主題

「豊かな学びで個を育む」 ～追究し発信する力の育成～ (2年次)

1. はじめに

科学技術の進歩、情報化、国際化、少子高齢化、核家族化、価値観の多様化、社会全体の規範意識の低下など、教育をとりまく環境が大きく変わる中で、約60年ぶりに教育基本法が改正され、我が国の教育改革は新たな一步を踏み出した。「人格の完成」や「個人の尊厳」など、これまでの教育基本法に掲げられてきた普遍的な理念は大切にしつつ、新しい時代の教育の基本理念が下記のように明示された。

- 知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した人間の育成
- 公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画する国民の育成
- 我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成

これらの理念に基づき、関係法令の改正を行うとともに、平成19年度内に教育振興基本計画の策定をめざし具体化がすすめられている最中である。

学習指導要領についても年度内改訂に向け審議が加速している。その改訂の視点は、教育基本法の改正に対応する教育内容の再検討と「学力低下」への対応という2つの流れの中で進められている。前者については、道徳教育の内容・形式両面にわたる見直し、我が国の伝統、文化を受け止めそれを継承・発展するための教育の充実、宗教に関する教育の充実、情報教育の推進など具体的な教育内容の検討が進められている。また、後者については、学力低下論、ゆとり路線への批判、PISA調査の結果やその学力観、学習の到達度、理解度を把握するために実施された「全国学力・学習状況調査」の結果などを踏まえ、新たな学力観や教育課程の構造の見直し作業が進められている。

学力に関する考え方としては、「基礎的・基本的な知識や技能」の習得と、「自ら学び、自ら考える力」を育むことを「確かな学力」とし、これに「豊かな人間性」や「健やかな体」を育むことを加えて「生きる力」とする学力観がとられている。また、「学力低下」の懸念に応えるべく、一方では、反復練習等を通じて「基礎的・基本的な知識や技能」を徹底して身につけさせることを、他方では、コミュニケーション力、知識・技能を実生活で活用する力、構想を立て、実践し、評価・改善する力などの育成が強調されている。「習得型の教育」（基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着）と「探究型の教育」（自ら学び自ら考える力の育成）の統合により「確かな学力」は育まれるという考えが打ち出されているのである。

このような状況にあって学校教育の果たすべき役割は、習得した知識や技能を活用して探究する力（表現力・コミュニケーション力・思考力等）をつけていくことである。また、社会全体の利益のために尽くす精神、国や社会の問題を自分自身の問題として考え、積極的に行動する精神を育てることである。そして、郷土や地域社会、我が国や他国、世界についても多様にかつ多面的に学び、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、世界に貢献できる国際性を身につけた人間を育成することである。

2. 研究主題について

(1) めざす生徒像

本研究を進めるにあたって、本校生徒の実態を踏まえた上で、私たち教師が育てたいと願っている生

徒像を次のようにまとめた。

① 自分の興味関心を大切にし、何事にも意欲を持って取り組む生徒

自分の興味関心のある学習活動に生き生きと取り組み、直面する課題や困難に立ち向かっていき、自己実現に努めようとする生徒の育成。

② 自分の思考を大切にし、自己の学びを追究する生徒

他者と関わりながら、自分なりの考えや表現を作り上げ、自分の学びへと深めていくことのできる生徒の育成。

③ 自分自身を大切にし、自分が関わる他者、社会、自然との共生を大切にする生徒

他者と共通の規範意識を身につけ 周囲の人々と協調しながら、社会の一員として生活を送ることのできる生徒の育成。

④ 異なる考えや文化を認め、異なる文化を持った人々と共生しようとする生徒

広い視野を持ち、多様な文化、生活様式、習慣、価値観を尊重し、他者とも共に生きるために、相手の立場を尊重しつつ、すすんで国際社会に貢献できる生徒の育成。

⑤ 自分や自国の良さを理解し、何事にも積極的に関わろうとする発信力のある生徒

自分や日本の生活・文化・歴史・習慣を正しく理解し、自分の考えや意思を表現できる生徒の育成。

(2) 研究主題とかかわって

① 「豊かな学び」をどのようにとらえるか。

私たちは研究主題に掲げた「豊かな学び」を、めざす生徒像に照らし合わせて、「個性を拓く学び」、「社会につなぐ学び」、「世界と結ぶ学び」の3つに視点をあてて考えていくことにした。

「個性を拓く学び」とは、他者とかかわりながら、自分なりの考えや表現を作り上げ、自己の学びへと深めていくことのできる資質や能力を培う学びである。特に、特色ある選択教科、必修教科、総合的な学習の時間において、自分の可能性を発見させ、個性を伸長させたいと考えている。

「社会につなぐ学び」とは、他者と共通の規範意識を身につけ、周囲の人々と協調しながら、社会の一員として生活を送ることのできる資質や能力を培う学びである。特に、学校行事や総合的な学習の時間における様々な体験や活動を通して、人としての健全な倫理観を身につけ、主体的に判断し、適切に行動できる生徒を育てていきたいと考えている。

「世界と結ぶ学び」とは、国際社会において、「自ら成長しながら」他者とも「共に生きる」ための子どもにとって必要な基礎的な資質や能力を培う学びである。そのために国際性を身につける体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れ、広い視野を持ち、異文化を理解し、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できるための外国語を使ったコミュニケーション能力の育成を図っていききたいと考えている。これらの3つの学びでつけたい力は以下の通りである。

個性を拓く学び

社会につなぐ学び

世界と結ぶ学び

<つけたい力>

- ・他者とかかわり合いや学び合いを通して、自己の学びを深められる資質や能力。
- ・学習の中で得た見方や考え方を、他者とのやりとりを通してより豊かなものとし、自ら表現・発信する力。
- ・思考力を高め、直面する課題や困難に立ち向かっていく力。
- ・自己の学びを正しく評価し、内省を生かして自己実現に努めていく力。
- ・他人と協力し、社会と共生しようとする態度や能力。

<つけたい力>

- ・異なる考えや文化を理解し、尊重しようとする態度や能力。
- ・異なる文化を持った人々と積極的に共生しようとする態度や能力。
- ・自国の言葉で自分の考えや意思を表現できる力。
- ・相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できるための外国語を使ったコミュニケーション能力。

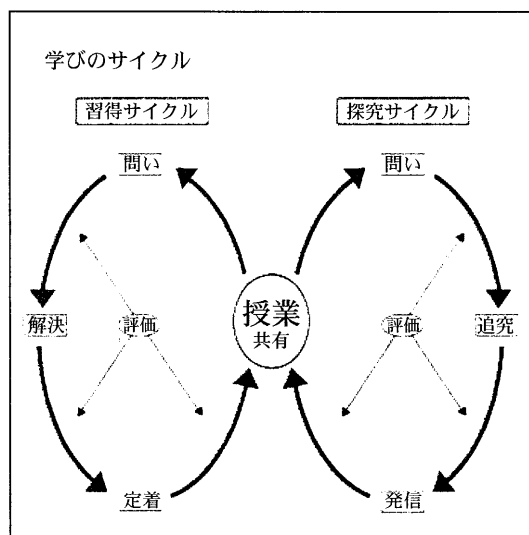
②「個の学びのサイクルについて」

「学び」とは、「問い」を解決していくために、自己内対話（個の学び）や仲間との相互的活動（集団の学び）を通して、「問い直し」を続けることにより学習を進めていく状態であると考えられる。

この「問い」とは、学習を進める中で生じる様々な疑問や課題である。生徒は、疑問や課題が生じることにより、知的好奇心を持ち、意欲的に学習を進めることができる。そして、既習の知識や技能を確認しながら、その疑問や課題の解決を図る中で、発展的な「問い」や新たな「問い」を生むことになり、この「問い」の高まりが学習をさらに追究し、発信していこうとする個の成長につながると考える。

子どもたちに確かな学力を身につけさせるには、「知識や技能」だけを教えるのではなく、子どもの「関心・意欲」を高めながら、問題を解決し、追究する授業の中で「思考力・判断力・表現力」等も高めていかなければならない。すなわち知識や技能という記憶中心の能力と、学習意欲を核にした自主的な問題解決という思考中心の能力が重要なのである。そこで、『学び』を①基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させる学び（習得）と②知識・技能をもとに、それらを活用して課題を追究し、発信する学び（探究）の2つのサイクルでとらえていくことにした。

<個の学び>



(市川伸一氏の「学習の2サイクルのバランスとリンク」参考)

「習得サイクル」

授業で「問い」を持ち、わからなかったことを授業で理解する。さらに基礎的・基本的な知識や技能をしっかりと獲得し、定着を図る。

「探究サイクル」

授業の中での色々なテーマに触発され、「問い」をもち、知識や技能をもとに、自分でまたは他者とともに練り上げ追究した結果を発信する。それらを仲間で共有し、討論やアドバイスを通じてさらに追究を深める。論理的思考力や論理的表現力を獲得する。

「学び」にも「基礎から積み上げていく学び」と逆に「基礎においていく学び」がある。前者は学びのサイクルでいえば、習得サイクルから探究サイクルへ入っていく学習であり、後者は探究サイクルの学習を行うことにより、基礎基本の大切さ、必要性を理解し、再び習得サイクルへもどっていく学習である。どちらにしても重要なのは、それぞれのサイクルだけで閉じてしまうのではなく、この2つのサイクルが、相互に関連しあうことで生徒の力を伸ばしていくことである。知識・技能の獲得が追究活動を促進したり、追究活動が知識・技能の定着をより深めたりするのである。

また、疑問や課題を明らかにし、自己の学びを振り返ることで、自己の変容を認識し、学んできたことの価値に気づき、自らの学びに成就感や達成感を味わうことができる。成就感や達成感を味わうことができれば、自己の学びで自信を持ち、さらに挑戦してみる意欲もわき、そのことが自分の可能性をどんどん広げていくことにつながると思われる。

3. 一年次の研究に関して

豊かな学びの中で、生徒が「問い」を持って、主体的に学習を進めていけば、基礎的・基本的な知識、技能がしっかりと身につく、それらをもとに困難な課題にも意欲的に取り組み、追究し、発信する力が培われ、個の成長につながると考え、以下の2点に絞って研究を進めた。

研究の視点

- (1) 教科で『豊かな学び』（「個性を拓く学び」、「社会につなぐ学び」、「世界と結ぶ学び」）を明らかにしていく。
- (2) 教科で身につけるべき力の定着を図るために「習得」と「探究」に着目した授業の工夫を図る。

「習得サイクル」における重要性を認識し実践を行った結果、全教科にわたり一定の基礎的な力が培われた。しかし、「探究サイクル」における追究し発信する力は、子どもの個々の力にゆだねられ、全体を引き上げるまでには至らなかった。そこで、他者の考えを聞いて、自分の考えを補強したり発展させたりする活動や、子どもどうしのかかわり合いの中で、多様なものの見方を学び、高め合い、さらに追究し、発信する場を設定する必要があると考えた。

4. 本年次の研究内容とその方法

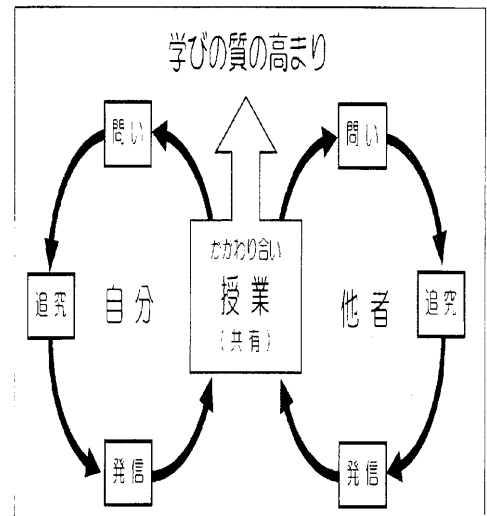
① 学び合う授業づくり

「豊かな学びで個を育む」ためには、子どもの「問い」を重視した授業を展開する中で、「学びの質」を高めていく必要がある。発展的な「問い」や新たな「問い」は、子どもどうしのかかわり合いの中で、他者の考えを聞き、多様なものの見方を学び、お互いに高め合うなかで数多く生まれてくるはずである。そして、その「問い」の高まりが追究し、発信する力の育成につながるのである。このような理由から、「問い」を解決していくために、他者とのかかわり合いや学び合いを重視し、そのような場面を教師が効果的に設定する必要があると考えた。

私たちは、学びの質を高めるために、授業での活動のあり方や学び合う関係、授業で使われるモノ（教具）や様々なこと（出来事）やひと（人）の支援を得ることのできる学習の場を準備する必要がある。仲間や教師、現実のモノやこととの出会いは、「問い」を生み、学ぶ意欲を引き出し、子どもの思考を豊かにするものと考えた。

学級集団には、いろいろな能力を持った子どもがいる。疑問、迷い、正解への到達の仕方もさまざまである。大切なことは、いろいろな子どもの発想を授業に生かすことである。仲間とのかかわり合いを通して、「問い」に対して、多様な異なる視点で互いに考えをたたかわせ交流させることで、一人ひとりの学びはさらに発展し、深められていくものと考えた。人に説明しようとする、自分の考えを磨かなければならない。教えることや考えを共有することで理解が深まり生徒にとって真の力となる。また、

集団の学び



※これは探究サイクルを例に取ったものであり、習得サイクルでも同じことがいえる。

教えてもらう側の学びも深まる。このように、かかわり合い学び合う授業の中で、自分の考えを確認したり、修正したり、新しい概念を構築したりして、「学び」を広げ、深めていくことができる考えた。

「学び合い」を生かした授業を進めるにあたって、学び合いを生かす場を設定する必要がある。そのために1時間の授業の中に、小グループ活動（2人～4人程度）を組み込んでいきたい。少人数だと相談しやすい、発言しやすい雰囲気がある。考えをすり合わせたり、わからないことを気軽に相談したりすることがねらいである。

しかし、ただ単に話し合う時間を設けるだけであれば、学びの質の高まりは生じず、学び合いによる相乗効果は期待できない。わたしたちは子どもたちが共に考え援助し合うことが望ましい内容と、教師が体系立って説明し教えることが有効な内容を見極めなければならない。そのためには、生徒の思考過程をあらかじめ想定し、反応を予想することにより生徒の思考の流れや授業の文脈を断ち切ることなく学習の場を設定しなければならない。私たちの考える「学び合う授業」とは以下のとおりである。

- ①他者の考えや感じ方をきちんと聴く授業
- ②協同で「問い」を探究する授業
- ③他者に発信し、分かち合うことを大切にする授業
- ④自己の学びの高まりが実感でき、次への「問い」を大切にする授業

② 45分7校時の実施

現行の学習指導要領により各教科の時数が削減される中、学力低下問題と相まって、授業時数の確保が強くいわれるようになった。本校でもいち早く2学期制の導入や学校行事の見直しを行い、授業時数の確保に努めてきた。さらに本年度は、45分7校時の実施による授業時数の増加を行っている。

45分7校時（週32コマ）の実施は、授業時数を確保することにとどまらず、コマ数を増やすことにより、各教科それぞれに補充・発展などの学習を展開できるものと考えている。そのためにまず、年間の学習指導計画を見直し、単元や各時間のめあてを明確にするとともに、単元構成を再度行い、補充や発展学習を組み入れた。また、50分授業を45分授業で展開するための1単位時間の授業構成にも工夫をこらすとともに、授業のはじめに本時のめあてを生徒に提示し、授業の終わりにそのめあてを達成することができたかを確認することで、より充実した授業展開をめざしている。

表－1、表－2は今年度の各教科の時間数と校時表である。コマ数の増加分は、特に国語・数学・英語の3教科を中心にあてている。

以上の考えから、本年度は次に絞って研究を進めていくことにした。

研究の視点

学び合う場を効果的に設定し、教科のねらいに迫る授業を構築する。

5. 成果と課題

① 学び合う授業づくり

個の学びや集団の学びを活性化させるために、座席の工夫（ペア型、コの字型）や小グループ活動をおこなってきた。それにより意見交換が自然と行われ、発表や相談が容易となり、異なる視点で互いの考えを交流することができた。仲間との交流が、理解や思考を深め（基礎学力の引き上げ）、新たな「問い」を生み出し、学びの質を高めることができたと考えている。

また、可能な限り具体物を提供し、現実の社会で起きている事象を提示し、さらに視聴覚機器を利用することにより効果的な授業を展開する等、教材、教具に工夫を凝らしてきたことは、子どもの学ぶ意欲を引き出し、思考を豊かにするのに効果的であった。

しかし、小グループ活動において、すべての班が十分活動し、思考が深まっている段階にはまだ達していないように思われる。班活動の促進には、班構成から活用、応用までの望ましい形態を再構築する必要があると考えている。そしてさらに取り組みを活性化させていきたい。

学び合いを生かす場の設定

座席の工夫



- ・意見交換が自然におこなわれる
- ・仲間との連帯感
- ・班編成が容易



- ・発表者や仲間の
がんばりが見える

人とかかわる力や人間関係を育む

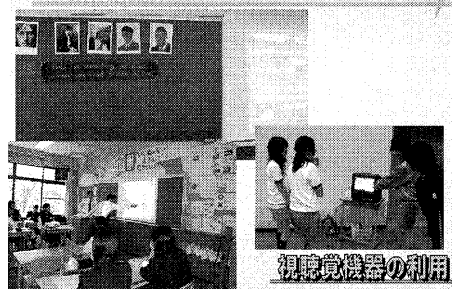
学習の場の準備



学習の場の準備



学習の場の準備



視聴覚機器の利用

② 45分7校時の実施

授業時数やコマ数の増加により、各教科それぞれに補充・発展的な学習を展開することができた。具体的には、補充学習では、多くのパターン練習を組み込んだり、小テストを実施したり、習熟度の授業を展開したりした。また、一単元に盛りこむことができる内容が増えることで、発展的な学習をおこなう機会も増え、観察・実験の結果をもとにレポートを作成したり、文章や資料をもとに自分の考えをまとめたりする学習活動の時間も増えた。1コマ5分間の授業短縮は、教師側が授業内容を精選することで、生徒の集中力がより高まった教科が多かった。これらは、本校の研究主題である「豊かな学びで個を育む」に迫ることができたと考えている。

しかしその反面、実験や作業やする時間、実技を伴う教科については、5分間の授業短縮により大変さを増し、準備や後片づけが休憩時間に食い込んでしまうことがしばしばあった。また、7校時目の授業は生徒の集中力の低下や疲れが見られたのも否定できない。

今後は、45分7校時の中で学びの質を高めるための教材内容の精選や年間計画の見直し（習得・活用・探究）等をおこなうとともに、基礎的・基本的な知識技能の習得とともに、それを活用する学習活動を充実させていきたい。

表 1

前後期制時間割における各教科等の時間表

2008/3/12 7:32

(「前・後期」は週あたり時間で、「計」は総時間数で表している)

学年		1年生					2年生					3年生					学習指導要領 学習指導要領(基準)						
期		前期		後期		計	前期		後期		計	前期		後期		計	1年		2年		3年		
週		3	14	14	4		3	14	14	4		3	14	14	4		50分	45分	50分	45分	50分	45分	
各教科	国語	4	5	5	4	168	4	4	4	4	140	4	4	4	4	140	140	156	105	117	105	117	
	社会	4	3.5	3.5	3.5	124	4	3.5	3.5	4	126	4	3	3	2	104	105	117	105	117	85	95	
	数学	4	4	4	4	140	4	4	4	4	140	4	4	4	4	140	105	117	105	117	105	117	
	理科	4	3.5	3.5	3.5	124	4	3.5	3.5	4	126	4	3	3	2	104	105	117	105	117	80	89	
	音楽	2	1.5	1.5	1.5	54	2	1.5	1	1	45	1	1	1.5	2	46	45	50	35	39	35	39	
	美術	1	1.5	1.5	2.5	55	2	1.5	1	1	45	1	1.5	1	2	46	45	50	35	39	35	39	
	保健	3	3	3	3	105	3	3	3	3	105	3	3	3	3	105	90	100	90	100	90	100	
	技家	2	3	2	2	84	2	3	2	2	84	2	1.5	1.5	2	56	70	78	70	78	35	39	
	英語	4	4	4	4	140	4	4	4	4	140	4	4	4	4	140	105	117	105	117	105	117	
	小計	28	29	28	28	994	29	28	26	27	951	27	25	25	25	881	810	902	755	841	675	752	
道徳		1	1	1	2	39	1	1	1	2	39	1	1	1	2	39	35	39	35	39	35	39	
学活		3	1	1	1	41	2	1	1	2	42	4	1	1	1	44	35	39	35	39	35	39	
総合	W(まとめどり)	16		27		43	33		17		50	20		43		25	88	総合					
	W 国語	1		1		32	1		1		32	1		1		1	32	70	78	70	78	70	78
	W 国際	5		5		10	17		5		22			5		5	5	70	78	70	78	70	78
	W 英語	5		6		13	2		5		13	2		5		6	13	100	112	105	117	130	145
小計		1		1		98	1		1		117	1		2		138							
選択	A	1		1		14	1		1		28	1		1		28	選択						
	B					0			2		28	2		2		42	0	0	50	56	105	117	
	C					0					0			2		22	70	78	70	78	70	78	
	国際											1		1		32	30	34	85	95	165	184	
小計				1		14	1		3		56	4		4		124	100	112	155	173	235	262	
総合+選択						112					173					262							
調整						-66					-85					-106							
総計		32	32	32	32	1120	32	32	32	32	1120	32	32	32	32	1120							

表 2

○ 校 時 表 (前期)

	平日時間帯	月	火	水	木	金
	8:20	職員打ち合わせ				
登校	8:30	朝の会(伝達放送・連絡)				
	8:40	朝の読書タイム				
	8:50					
1	8:55					
	9:40					
2	9:45					
	10:35					
3	10:45					
	11:30					
4	11:40					
	12:25					
	13:05	昼食休憩		12:30 終わりの	昼食休憩	
5	13:10					
	13:55					
6	14:05					
	14:50					
7	15:00					
	15:45					
	15:50	全員清掃			全員清掃	
	16:15	終わりの会			終わりの会	

水曜の5限 委員会活動・部活編成・校内研究授業等に用いる。

○ 校 時 表 (後期)

	平日時間帯	月	火	水	木	金
	8:20	職員打ち合わせ				
登校	8:30	朝の会(伝達放送・連絡)				
	8:40	朝の読書タイム				
	8:50					
1	8:55					
	9:40					
2	9:45					
	10:35					
3	10:45					
	11:30					
4	11:40					
	12:25					
	13:05	昼食休憩				
5	13:10					
	13:55					
6	14:05					
	14:50					
7	15:00			14:55	全員清掃 終わりの会	
	15:45			15:20		
	15:50	全員清掃				
	16:15	終わりの会				

水曜の6限 校内研究授業に用いるときもある。

【参考文献】

- ・「学び」を問いつづけて ―授業改革の原点― 佐伯胖 小学館 2003
- ・「学びへの誘い」 佐伯胖/藤田英典/佐藤学 東京大学出版会 1995
- ・「学ぶ意欲とスキルを育てる」 市川伸一 小学館 2004
- ・「公立学校への挑戦 ～授業を変える学校が変わる～」 佐藤雅彰 佐藤学 ぎょうせい
- ・「子どもをはぐくむ授業づくり 知の創造へ」 秋田喜代美 岩波書店 2006
- ・学校マネジメント(2007 3月号) “教育再生”の論点と公教育改変の方向 明治図書
- ・現代教育科学 (2007 6月号) 改正教基法で現場にとわれる課題 明治図書
- ・和歌山大学教育学部附属中学校 「いとなみ」 2006年

研究構想図

めざす学校像

一人ひとりの個性を伸ばし、豊かな心とやりぬく力を育む学校
国際社会で生きていくための基礎的な資質や能力を育む学校

めざす生徒像

- ① 自分の興味関心を大切にし、何事にも意欲を持って取り組む生徒
- ② 自分の思考を大切にし、自己の学びを追究する生徒
- ③ 自分自身を大切にし、自分が関わる他者、社会、自然との共生を大切にする生徒
- ④ 異なる考えや文化を認め、異なる文化をもった人々と共生しようとする生徒
- ⑤ 自分や自国の良さを理解し、何事にも積極的に関わろうとする発信力のある生徒

